空の色紙

Hahakigi Hôsei

帚木蓬生

新潮文庫

空の色紙

新潮文庫　は－7－8

平成九年十二月一日発行

著者　帚木蓬生

発行者　佐藤隆信

発行所　株式会社新潮社

郵便番号　一六二―八七一一
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部（〇三）三二六六―五四四〇
読者係（〇三）三二六六―五一一一
振替　〇〇一四〇―五―八〇八

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社金羊社　製本・憲専堂製本株式会社
© Hôsei Hahakigi 1985　Printed in Japan

ISBN4-10-128808-9 C0193

江苏工业学院图书馆
藏书章

色紙

帶木蓮生著

新潮社版

6011

目次

空の色紙……七
墟の連続切片……一三
頭蓋に立つ旗……二九
あとがき……三四

解説　香山二三郎

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

空(くう)の色紙

空(くう)の色紙

1

まっ蒼な、どこまでも澄んだ空だった。

山肌には等高線を刻みつけたように、段々畑が重なっていた。V字型の切れ込みの底に蛇行した川が光り、道路に沿って黒い町並みが点在している。併走する畔道の数で、山の頂きから谷あいまでの深さが知れた。

機体がかしぐと、右方の山中に二本の滑走路が見えた。険峻な大地の襞にぺったりとコテをあてたように、平らな台地があり、その一様な緑が周囲の複雑な地形から浮き上がっていた。丘陵が飛行場を青い天空の方に捧げ持っているという按配だった。

高度が下がるにつれて、茶畑の畔、樹木、小屋、道を行くトラックまでもがはっきりと見分けられるようになった。落ちていくとき、ひやりとした感覚が身体の芯を吹きぬけていった。カマボコ兵舎を思わせるビニールハウスから農夫がひとり出て、納屋の中に消えた。都会の空港とは違って、ここでは飛行機は余計な闖入者としか思えなかった。着地した瞬間、緊張が解けるかわりにつかみどころのない疲労が残った。

五十人程の旅客のあとについて長い廊下を抜け、到着ホームまで降りた。紺の背広を着て

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

歩み寄ってくる青年が、地方裁判所の佐山書記官であろうとの予測は裏切られなかった。黒鞄を持ち、銀髪に黒縁眼鏡の痩せぎすだと前以って告げていたせいか、彼のほうでもすぐ分かったらしく、

「小野寺先生ですね」

と問う口調には確信があった。三十歳を越したばかりとみえる体格の良い若者で、いささか硬くなりながら「地裁の佐山です」と名乗った。私が出迎えの礼を言い終わると、タイミングよく太い腕を伸ばして鞄を持ってくれた。

彼のあとについて空港ビルを出たとたん、冷気が背後から執拗に襟元にまとわりついた。F市から南下したはずなのに寒いのは標高のせいに違いなく、私はそのことを口に出して言った。

「鹿児島空港は初めてですか」

佐山青年は笑いながら、銀色の車のドアを開けた。助手席のシートを倒して、鞄を後部座席の奥に丁重に置いてから、私を促した。

「小さな車ですみません。上司が裁判所の車を出してやろうかとも言ったのですが」

と詫びたが、ひと際目立つスタイルの自分の車が大いに気に入っている様子だった。運転席につくと慣れた手つきでシートベルトを引いた。

「N村までは一時間半みておけばいいでしょう」

「急ぐ必要もありませんから、安全運転で」

私はあわてて釘をさした。
空港路からまもなく高速にはいった。車線はガラあきだった。佐山青年の運転も慎重で、私は胸を撫でおろした。
「久保タネの他に、娘の弘子、それに隣家の宮永定雄にも連絡しておきました」
「お手間でした」
私は礼を言った。
本来なら、証人たちを鹿児島裁判所に呼び出して面接するだけで済むのだが、事情の許す限り、現場を見ておくのは精神鑑定の定石であった。いかに詳細であっても一件資料は事件の輪郭をなぞるだけで、当事者の息づかいと肉声は伝わってこない。現場に立つと、一本の木、湿った路地、家の壁が音のない言葉で記憶を語り、すすり泣く。
鞄の中には、三人に対する質問と現場での調査項目を箇条書きにしたカードがはいっている。飛行機の中で何度もそれをチェックし、頭の中にしまいこんではいた。
しかし一方、いくら微に入り細にわたって事実をあぶり出したところで、死んだ者は戻らない、という思いは消えなかった。手を打つとすれば事件の起きる前でなければならなかったのだ。アンダーシャツが左肩口から脇腹にかけてたっぷりと鮮血を吸っている、久保芳夫のカラー写真が眼の底にこびりついたままだった。
「久保タネは、今でもあの家に住んでいるのですか」
私は先刻から気になっていたことを訊いた。

「そうらしいです。空き家にするわけにはいかないのでしょう。畑に出るにも、娘夫婦の住むK町からでは遠すぎますから」

佐山青年はルームミラーで私の方を見た。「しかし、並の神経ではできないことですね。亭主が息子を殺した家にひとり居残ることは」

私は頷いた。そして暗い農家で痩せた老婆が亡霊のように生きている光景を想像したものの、久保タネの顔を実際には知らないことに思いあたった。十数センチの厚さに及ぶ供述調書と資料を何回読み返したろう。加害者の久保勝吉をはじめ、二十人近い証人の発言内容をつきあわせて、食い違いと不明の箇所をみつけるのはひと仕事だった。その作業の過程でいつのまにか供述者のひとりひとりと面識をもったような気になってはいたが、顔と姿を写真で知っているのは、ひとことの供述もせずに死んだ芳夫だけというのは奇妙だった。

剖検台に横たわる彼は短髪でずんぐりした身体つきで、肉体労働者らしく胸筋が盛り上がっていた。目を閉じた土色の顔に、鞍鼻とぶ厚い唇が不細工についていた。またしても〈死んだ者は戻らない〉という例の思いが苦々しくこみ上げる。

高速道路の両側にしつこく続いた切り通しが絶えて、桜島が遠望できた。火口から上がる黒煙が澄んだ空を不吉なものに変えつつあった。

「先生がおっしゃっていたように、今夜の宿はK町にとりましたが、どうせお泊りになるのでしたら、指宿あたりでもよかったのではないですか」

「いや、それで結構です。明日はタクシーを飛ばして市内まで出ましょう」

私はシートに身を沈めた姿勢で答えた。

翌日の午前中には鹿児島市に戻って、刑務所で久保勝吉を診察しなければならなかった。鑑定依頼がきたのは三週間前だった。現地調査にはじめは鑑定助手を遣ろうかとも考えたのだが、事件のあった場所を地図で確かめた瞬間、急に気がかわった。不意打ちとしか言いようがなかった。思いたつともう猶予はできなかった。大学の講義や会議のスケジュールをやり繰りして一日半の空白をつくり、宿泊地も鹿児島市ではなくK町にすることに決めてしまったのだ。

車窓の左に海が広がっていた。ガラス板のように波がなかった。

私は鞄を膝の上に置き、裁判所から送付されていた資料を漁った。拘置所にいる久保勝吉が、次男の政二に宛てた手紙があった。稚拙ではあるが、読みやすい角ばった字だ。

〝今度のことはタネと芳夫が仲良くなり、一年くらいの間に三回、私を絞め殺すといってうちかかり、出ていけといって蹴ったり叩いたりして、私も出ていく所がないので、こういうことになりました。タネは一度もとめてくれなかった。前の二回は芳夫が政二のうちから帰ったあくる日の夕方のことで、今度は私がコタツに足を入れておりましたので、打たれたり蹴られたり、ここに来たときは右目も腫れて見えず、拘置所で三カ月治療してもらい、ようやくよくなり、宮崎に鑑定に行って、今帰ったところであります。芳夫は一番苦労して育てて、一番悪い子でありました。政二だけはあんな悪い人間になってくれない

ようにね、頼む。検察庁の階段を何度か転んで通ったこと、一生忘れませんよ〟

ところどころ文脈が通らないうえに、殺人罪で拘留されている自分の身上の深刻さが理解できていないために、ちぐはぐな読後感を与えた。

文中にある宮崎云々というくだりは、M大精神科S教授の手になる第一鑑定を意味していた。S教授は、犯行が嫉妬妄想に基づいており、従って勝吉が慢性アルコール中毒に罹患していたという鑑定結果を提出したが、検察はこれを不服とした。確かに、法廷での鑑定人尋問で、

「仮りにタネと芳夫が実際に肉体関係があったということになると、これは先生の言われるように嫉妬妄想になるのでしょうか」

と詰問されたS教授の答弁はどうみても歯切れが悪かった。

「とすれば、それは事実と一致することになり、タネと芳夫の二人にしか分からないわけですが、いろんな人の証言を総合して、どうもそういう風には考えられない、おかしい、という点があるので、妄想であると結論したのです」

「それでは、疑い深いのと妄想とはどう違うのでしょうか」

水かけ論になるのを避けて検察官は矛先を変えていた。

「一応疑惑だけなら薄らぐのが普通ですが、妄想になりますと、いかなる立証をしても確信は変えないと言えます」

「そうしますと、徹底的に疑い深い人間が、実際に肉体関係のあったことに対して、自分の考えを決して曲げずに主張することもおこると思いますが、その場合も妄想と言えるのでしょうか」

さすがに巧妙な質問ではあった。ここでS教授は返答に窮し、「その場合は両者の間に明確な境界は引けない」と答えた。

「それでは、久保勝吉の場合も妄想であるという確証は何もないわけですね」

検察官の勝ち誇った顔が見えるような、法廷速記録の内容だった。

被告人をあくまで通常の殺人罪で裁きたい検察側は、S教授の第一鑑定を不服とし、裁判官も再鑑定を認めた。私にお鉢がまわってきたのはそのためだ。

車は高速道路から鹿児島市内にはいっていた。路面電車が傍を走るたびに、どの車も器用に車線を変えた。

「刑務所の所在地はお判りになりますね」

佐山青年が言った。「明日は直接行かれて、守衛に用件を告げられるだけでよろしいはずです」

「十時でしたね」

「ええ。まあ時間厳守ではないですから、適当に十時頃で」

佐山青年はきさくに答えた。

私は資料を鞄にしまいこみながら、佐山自身のことに話を向けた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com